

岩手大教育 清水房 郡山女大 工藤澄子
県立盛岡短大 O大森禪

目的 家庭科担当教員数は女子生徒数や学科の変遷、教育課程の変遷によって流動的であるが、特に普通科においては教育課程編成の影響が大きく、担当教員数の確保が教科の指導上影響があることはいうまでもない。岩手県高校家庭科の戦後史の中から、担当教員の変遷に視点を置いて考究することにより、新しい家庭科を創り出す手がかりを得たい

方法 昭和20、30年代の家庭科教員名簿が全く得られず「学事関係職員録」を手がかりにして、当時代に勤務していた教職員から聞き取り調査を行って補完した。40年、50年代は「家庭部会」の名簿を中心にしながら「教育年報」、「学校一覽」を基礎資料とし本務教員を対象として調査した。

結果 女子生徒数に対する家庭科教員数の占める割合は28年度1.6%だったが順次減少し53年度0.5%と半になった。原因は①家庭科単位数の減少、②定時制が全盛時代から激減時代へと移行し本分校の統廃合による縮小、③家政科・生活科ののび悩み、④大学・各種学校等の進学率上昇と進路の多様化等が考えられる。普通科女子校の教育課程編成における家庭科選択状況の推移は①複線型から単線型へ ②多単位選択から少単位選択へ、③選択履修者の減少あるいは必修のみの履修と変化し担当教員が減少している。一方家政科、生活科における担当教員の生徒数に対する比率は安定しており実習助手の配置状況は年々増加している。又特殊教育諸学校における高校家庭部会所属者の数も増加し15年間に10倍となった。年齢構成の推移は昭和28年度は20～25歳の若年層が43%を占めていたが、47～53年度はどの年齢区分も平均化された。